

2024年1月19日 Vol.214

日経平均4万円時代を前にしたIPO市場

令和6年も半月を過ぎる中で、日本の株式市場は堅調な推移を辿り日経平均が先般3万6000円台乗せを果たし、4万円台乗せを想定する見方も台頭してきました。国民の金融資産ポートフォリオを銀行預金偏重から株式へとシフトさせようとするための新NISAが始まったこともあり、株価の上昇に拍車をかけつつあります。日銀のマイナス金利等の金融政策と米国の物価対応の金利上昇を背景にした日米金利差による円安傾向が相変わらず続いているほか、東証による低PBR是正要請が各上場企業経営者の意識改革ともなり、既に多くの企業からは是正のための取り組み方針が示され始めたことも背景になったの株高で上海や香港市場の低落傾向とは対照的な展開です。

年初に大地震に見舞われた日本ではありますが株式市場はこうしたことを背景に時価総額の大きな主力銘柄を中心に力強い上昇傾向が見られる一方で、中小型株が多いグロース市場などの多くの銘柄は蚊帳の外にあり、全体市場の上昇の割に個別銘柄は反対に値下がりしているとの実体が報じられています。TOPIXが過去3年間で46%もの上昇が見られる一方でグロース250は同期間に17%も下落。TOPIXに比べて極端な低迷が見られます。こうした指数間の違いはIPO市場にも影響しており、初値が公開株価を下回るなどの影響を含め、その後の顕著な株価低迷をもたらしています。

昨年のIPO銘柄数は名古屋市場や札幌市場を含めて96銘柄でしたが、そのうちの25銘柄は初値が公開株価を下回って初値がつきました。また、変わらずであったのは3銘柄でした。残りの68銘柄については、大なり小なり初値は公開株価を上回りましたが、初値をつけた後の株価が活発に取引された事例は一部の限られた銘柄に集中し、多くの銘柄が上場後の高値から大きく値を下げる結果になりました。

先般話題のSB証券問題では引受証券であるSB証券の業務違反（IPO銘柄の初値が公開株価より必ず上回るのでそのIPO銘柄に投資するように勧誘する行為）が露呈され営業停止に追い込まれました。この事態が発覚した影響もあるのか12月のIPOについては15銘柄のうち8銘柄が公開株価割れでスタート。今後もこれまでのような初値が必ず高くなるとは言えない状況となりそうなもの致し方ないかと思えます。一方ではIPO市場が正常化するとも言え、投資家が比較的安く初値で投資できるチャンスが出てきたとも言えそうです。

**** **** **** ****

昨年のIPO市場を振り返ってみますと1月26日にソーラー関連のテクノロジーズ（5248・グロース・公開価格1000円）に続き2月にWEBサイト保守運用事業のプライム・ストラテジー（5250・スタンダード・同1390円）がIPO。これらは初値が公開価格に対しそれぞれ3.6倍、2.2倍の水準で寄り付きましたが、その後は波乱の展開。テクノロジーズについては4月に1420円の安値がありましたが業績の上

東京 IPO 特別コラム

方修正から直近になって4830円まで急騰。反対にプライム・ストラテジーについては年央高値4690円から1382円の安値をつけるなど明暗が分かれました。多くの銘柄がIPO後の情報が乏しい中で株価の低迷が見られますが、積極的なIR活動も含め、ポジティブな情報によって株価は見直されることとなります。例えばプライム・ストラテジーは決算発表と中期計画を12日に発表し、それに伴い株価は反転上昇の動きを示し始めております。

このように決算内容や事業内容がポジティブに変化すると株価の反転上昇が期待され、低迷してきた株価に陽のインパクトをもたらすことにもなりますので今後はより一層、個別企業からの決算発表や中期計画の内容に関心を持っておく必要があります。

昨年3月のIPO銘柄は15銘柄、初値が公開株価を上回らなかったのはAnyMind(5027)のみ。あとの14銘柄は上昇して始まりました。4月も9銘柄のうち初値が公開株価を下回ったのはコインパーキングの日本システムバンク(5530)名証メインのみ。その後の株価も穏健推移となっております。4月は多くの皆さんが注目されたアイスペース(9348)が上場し、人気を集め初値1000円と公開株価254円に対し4倍近くで寄り付きましたが、更にその後2373円の高値まで急騰しましたので、この株で利益を得た方も多いのかも知れません。今年もロケット打ち上げが予定されており、折に触れ注目されるものと期待されます。

また、昨年12月は同じく九州大学発祥の宇宙関連企業、QPS研究所(5595)もグロース市場に上場し関心を高めました。まさに株式市場にとっても宇宙時代の幕開けをサポートしはじめた元年となりました。

時価総額の大きさでは昨年10月にプライム市場に再上場を果たした半導体製造装置関連のKOKUSA I ELEC(6525)が穏健に上場してから高値3440円まで62%上昇し、時価総額を7600億円以上にまで高めて注目されました。今年もこうした半導体関連銘柄は人気を集めるものと考えられますが、上昇スピードが速いとその後の調整場面も想定されます。半導体関連としては9月25日にスタンダード上場の半導体洗浄装置メーカーのジェイイーティー(6228)も人気化が見られました。とは言え同社株は初値が4420円で公開株価4630円よりも安く寄り付きました。初値から一旦は3240円まで売られましたが、その後の株価は11580円となり、安値比3.6倍まで買い進まれるなど素晴らしい成果を収めました。

こうした華々しい銘柄がある一方でIPO後に株価低迷した多くの銘柄が依然としてあります。その中では筆者の個人的な視点でピックアップした割安感のある銘柄としてIT機器保守メンテナンスのSHINKO(7120・スタンダード・予想PER7.8倍)シニア女性向け雑誌と物販、イベント運営のハルメク(7119・グロース・同PER8.2倍)、ソフトウェア検証サービスの日本ナレッジ(5252・グロース・同PER13.6倍)、オンライン英会話サービスを展開するビズメイツ(9345・グロース・同11.2倍)、古いビルの再生、転貸借事業を展開するリアルゲイト(5532・グロース・同1

東京 IPO 特別コラム

0.8倍)、EV向け電子部品信頼性評価事業、半導体事業のクオルテック(9165・グ
ロース・同10.9倍)、屋外用コンベア部品のJRC(6224・グロース・同10.7
倍)などがあります。日経平均4万円時代を前に2月からスタートするIPO市場ととも
に、これらの低PER銘柄の動向に本コラムをご愛読されている皆様とともに注目してい
きたいと思います。

なお、本コラムは事情でしばらく休載しておりました。今号より再び復活したいと思います。
遅ればせながら本年もよろしく申し上げます。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)